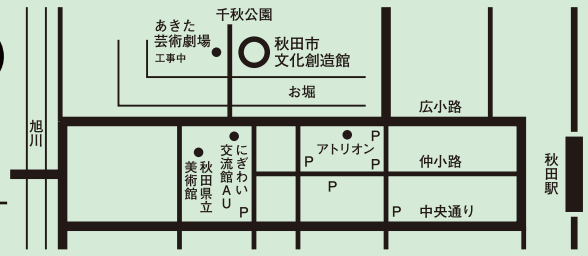
秋田　市　文化　創造　館
AKITA　CITY　CULTURAL　CREATION　CENTER

〒010-0875 秋田県秋田市千秋明徳町 3-16
開館時間 9:00–21:00
休館日・火曜日（火曜が休日の場合はその翌日）
・12月29日–1月3日
お問合せ Tel: 018-893-5656　Fax: 018-893-5659　e-mail: info@akitacc.jp
公式ウェブサイト https://akitacc.jp

そう SO　する SURU? ？

2号　2022年3月



●アクセス：JR秋田駅西口から徒歩約10分
●駐車場はありませんので近隣の有料駐車場をご利用ください

素朴なものに
自分の人生をかけて
興味がある。

油谷満夫さんが大事にしている道具「木の岐（また）」

2021年12月に開催された展覧会「博覧強記・油谷満夫の木の岐展」。
木々の自然の造形を活かして生み出された道具、
名づけて「木の岐」について油谷さんにうかがいました。

民具とは、民衆の生活の知恵の結晶です

戦後の農地解放で小作人が地主になり、機械で農業を生産するようになって、苦労した時代の道具が小屋からなくなっていく。もったいないなあと思って。地主と小作人は、非常に貧富の差があって、地主の蔵からは借用書がいっぱい出てくる。うちは商人だったから、それは何故なのか、と。学校に行くと実際に農業の仕事をするわけです。畑を鍬（くわ）でおこす、種を播く、麦刈りもするし、大根を売りに行く。当時は飢えている時代で、人参が穫れれば、泥っこ拭いでかじったり、大根も生かじりしたり。農業の歴史は苦しいとだんだん分かってきて。「おめわげのに百姓のごとよぐおべでらがら、はいれ。おぢゃっこのめ」ってお年寄りからいろんな話を聞いて、そんななか軒先に下がっている道具に目が行くし、使わなければもらいたいな、と言うと、快くくれたし、小作の人が地主になって、家を建て替えすると、外にも捨てられている。

納豆売りのばあちゃんの藁ぐつ

経済的な理由で高校を辞め、二十歳の頃だね、借金のかたに昭和27–29年、増田の塩の問屋さんで働いていたとき。隣の町へ配達の途中で、十字路に納豆売りのばあちゃんがいた。「納豆～納豆～」って売って歩いて、藁を開いて「粘ってるでしょ」なんて。藁ぐつを提げていて、「それ何？」って買ったのが強烈な思い出です。それまでも古いものは買ったことがあったけど。お手製の藁ぐつからメーカーのゴム長靴に移行時期で。田舎の人というのは、ものを大事にする。貧乏人には貧乏人の生き方がある。貧乏が染みついている人にとっては、その時代の道具は嫌なものだと思う。いろんな人から昔の暮らしを聞いている。それで私は虜になったわけ。特に単純なもの。ものには前世があって、生命力が付加されている。使った手の痕跡や汗、「使用痕」って言うんですけど、どういうものが理想か自分なりに考える。

1は藁打ち
藁を叩いて柔かくする道具です。縄を綯（な）うために、ままだと硬くて、きれいな仕上がりにならないの。藁は長さが決まっているから、継ぎ足しをするでしょ、その継ぎ目も柔らかくないと、きれいにできないし、丈夫にならない。体験からくる手慣れた力加減というものがあって、叩きすぎると軽くなりすぎる。石の上で豆を潰すのにも使います。大豆を潰して、大根を栽培する肥料にします。潰さないのは、種、芽が出る。潰すと養分になる。

5は石うすのハンドル
米を粉にするうすの把手です。米の粉を練って、茹でて、お味噌味で食べる。それか「たまり」で。味噌にも水分があるでしょ、うわ澄み液を「たまり」と言います。それでなめこの煮たものは醤油なんてもんでね。私のうちの味噌は美味しいの。というのは、壁にその家の菌があるから、味が違うの。話は変わるけど、枝豆を藁で焼いて食べたら、天下一品の味！　畑で藁を立てて藁を囲むように枝豆を立てて火を点けて燃やす。藁の黒い灰の中を探して拾って食べるくらい美味しい。一服だって言うと、家に戻ってお茶っこ持ってきて。化学肥料を使うよりも、自然な堆肥、有機物質を使ったほうが美味しい。何千年分の落ち葉で、太陽光線も土地によって違って、「産地」とはそういうもの。

6は囲炉裏の上に紐で天井からぶらさげる
紐がひっかかって抜けないようになっている。鍋をかける以外にも乾かすためとか。3も2も同じ。フックが2つある。

7は差し茅をする道具
茅はススキの同系です。屋根の日当たりの悪いところは雨で腐りが早い。そうすると差し茅と言って、補うように茅を差していく。

使えそうな枝は冬にとる
これは何かに使えそう、という枝を山で発見したら、木が休眠している冬にとる。すると木にカビが生えない。暑いと切ったところから樹脂が出て木が腐ってしまう。夏に見つけても冬を待って切るのは心がけがいい人。道具は代々使うもの。人間の代わりになるもの＝道具。だから大事にする。

10はせやみこき※
冬なると、朝起きて米を研ぐとき水が冷たいでしょ。この棒で研ぐの。もっといい形があるんだけど。これは出来が良くない。下が出っ張ってるし、切りっぱなし。
※せやみこき＝怠け者のこと

8と9は豆打ち棒
時間がたって硬くなった枝豆を棚で乾かす。そうすると鞘が開いて豆が跳び出す。跳び出さないものもあるから、筵（むしろ）を敷いて、これで叩くと、脱穀になる。8は道具としては、非常にまずい。カーブしていないと、棒を握った自分の拳も打つことになる。9は縛って叩きやすくしている工夫があるけど。展覧会のチラシの表紙にもなった道具（11）も豆打ち棒です。重さといい形といい、野暮じゃないでしょ。カーブのバランスもいい。名品です。

11

家のはんてんのシンボルマーク（4）は、又とカネ。父親の名前「又吉」の「又」と、大工のL字形のものさし「カネジャク」の「カネ」。

博覧強記・油谷満夫の木の岐展
期間：2021年12月12日（日）–16日（木）
会場：1Fコミュニティスペース
主催：NPO法人アーツセンターあきた

美術家・中村裕太氏による
展覧会レビューはこちら

写真：須賀亮平
　　尾花賢一（11）
聞き手：熊谷新子

油谷満夫（あぶらやみちお）さん
昭和9（1934）年秋田県横手市生まれ。県立大曲農学校卒業、昭和25年から民具の収集を始める。秋田県立横手城南高等学校定時制課程卒業。昭和54年から13年間、角館町「青柳家」に「民具の館」を開き、「平鹿町農村文化伝承館」の主任に就く。その後、秋田県湯沢市秋の宮温泉郷に秋乃宮博物館を平成4年に開館（平成22年閉館）。平成24年4月「特定非営利活動法人　油谷これくしょん」を設立。
●施設の見学について　施設の見学をご希望の場合は、事前にご相談下さい。
電話：018-893-4981　FAX：018-893-4982　（水～日、祭日オープン）

「SPACE LABO」の滞在クリエイター5人による5つのコラム

クリエイティブな視点でまちなかを活用するプランを考える公募「SPACE LABO 2021」。二次審査ののち、今冬、秋田市中心市街地に滞在したクリエイターの視点。

おおしまたくろう（サウンドマン）

【雪の上の滑琴】

こんにちは、おおしまたくろうです。いつもは京都を拠点に自作楽器を使った音楽活動をしています。今回の滞在では、スケートボードとエレキギターを合体させた「滑琴（かっきん）」を使って活動しました。秋田に滞在して興味を引かれたのが、雪による街の境界線の引き直しです。滞在中は歩道と車道の境界線がわからなくなるほど雪が積もっており、街の中がエキサイティングな空間に変わっていました。また、初めて雪の上で滑琴に乗ったのですが、タイヤが雪に埋もれて進むことができませんでした。そこで融雪歩道に場所を移して活動していると、融雪工事がされている場所とそうでない場所、という市内の優先順位のようなものが雪によって視覚化されていることに気づきました。雪が街の境界線を覆い隠すこともあれば、明らかにすることもあるのです。ボーダーラインの上で自由を表現してみせることがストリートの感性です。滞在で見つけた街の境界線をヒントに、ジョイフルなプランを提案したいです。

「滑琴」とはスケートボードにエレキギターの弦・ピックアップを取り付けたもの。地形や道路の凹凸、滑り方によって、その土地特有の音を奏でる。

三本木歓（美術作家）

【三角の空き地】

千秋トンネル通りのとある場所に三角の空き地がある。鋼管パイプとロープで囲われた、ごくありふれた空き地である。5日間の秋田滞在期間中、私は何度もこの空き地の前を通った。というのも、今回自ら設定した調査エリアの範囲がこの空き地を含む「〒010-0876の街区」を対象としていたからである。この街区の大部分は千秋公園が占めるが、一部にこのような空き地や住居、店舗、小学校等が組み込まれている。ちなみに住居や店舗であっても住所表記は「千秋公園○-○」となっていて、文面だけを辿れば公園？と仮想し得るような敷衍性を感じる。近隣の住民の方にお話を伺ったところ、この空き地の所有については、以前の持ち主に返還された、とのこと。この三角の空き地は何を物語るのだろう……、養鯉場の跡地でもあるこの場所は（昭和30's～昭和50's にかけてこのエリア一体は養鯉場であった。その経営者の家が今現在この三角の空き地となっている）。

椎木彩子（美術作家・イラストレーター）

【守りたいもの】

6日間の秋田滞在で私が出会ったのは秋田市（近郊を含む）で今生きている人の心の風景でした。町でお店を営む人、秋田の民話を継承する人など、さまざまな人たちです。秋田の人々は少し控えめのようで、内に秘めた豊かな感情に満ちていて、とても優しい。雪国らしい我慢強さと県外から行きにくいからこそ残る日本の原風景が、お話しの中に垣間見えたような気がしました。地形、風土、道（交通）、歴史は、人の気持ちの形成に強い影響があるようにも思いました。人も場所もどんどん変わっていくけれど、それでも変わらないように守っていきたいという願いにも感動しました。自分にとっての守りたいものはなんだろう？とも考えました。雪が溶けた春の秋田もいつか見てみたいです。春を今か今かと待っている人々の気持ちを想像して、私の中にも何か芽吹きました。こんな機会を与えてくれた秋田市文化創造館のみなさん、出会ってくれた秋田の人たちに感謝します。

椎木彩子さんによる公募「拝啓、秋田市～秋田市におくる愛の詩編」で集まった言葉と椎木さんの絵。

臼井仁美（アーティスト）

【真っ白な湖に浮かぶ群島】

冬の秋田に抱いた最初の印象。湖かと思った広大な白は、雪に覆われた田んぼだった。群島に思えたやわらかな形のかたまりは、防雪林を携えた集落やお墓だった。きっと夏には緑の湖になって、秋には黄金の湖になる。田んぼは湖になる、集落は島になる。見方は一つにとどまらない、それ自体はそれ自体であるだけではないことを、秋田の景色が教えてくれる。

【市街地の植栽】

勝平得之の「花四題」に見られるように、冬の秋田市街地植栽の中心は今でも南天、椿、松のようだった。今風の建物が立ち並び、街路樹が整備されているけれど、得之の世界を現在の集合住宅の花壇にも見つけた。多くの植物は麻紐や藁紐でくるっと一周、またはくるくるっと二周、広がる枝をまとめるようにくくられている。15cmほどの高さの小さな小さな裸の躑躅も一つ一つ。冬には見えない春の芽の力が雪の重みで消えないように。見えないいのちの存在を知る人々が暮らす場所。

福井裕孝（演出家）

【消費者らしさ】

滞在一日目。秋田市街地にある商業施設やスーパーマーケットなどを案内していただきながら街を歩いた。これといったあてもなく目についた場所にふらふらと入って、他人が買い物をしている様子を（不審がられない程度に）見たり、たまに買い物をしたりして、店内を廻る。次第に滞在活動という口実でショッピングをしに来たしょうがないやつになっているのでは？ と不安に思えてくるのですが、何かを得ようとか見つけようと意気込んで街を歩いてもきっとロクなことにはならないので、消費者らしくいろいろなものを見過ごしながら歩いた。スーパーなんかで、例えばキムチを買うかどうか考えているときに現れる仕草や振る舞いなど、空間ともの（商品）によって振る舞いを規定されながら、買い物中の一々の判断が身体に反映されていく様子に目がいった。まだ具体的なプランは思い付いていないが、買い物を通して「個人」と「もの」との間に生まれる経験を描出するようなことを考えてみたい。

「SPACE LABO」滞在レポートはこちら

未来の生活を考えるスクール

「未来の生活を考えるスクール」は開館プレ事業として2019年度から始まっていて、「創造力を養う出会いの機会をつくる」という役割を担っている。開館から1年近く経ったいま、スタッフや館を利用する人たちの振る舞い・雰囲気によって、場所の雰囲気もだんだんと決まったり変化したりするのだ、という実感を持ち始めた。

「スクール」以外のプログラムにも色々と顔を出してくれる人、一人のゲストめがけて来る人、たまたま通りかかった人、テーマ設定に切実な思いを持つ人、関わりの深度はさまざま。今年度、県内外から招聘したゲストのトークに加えてたいていは、ゲストと参加者／参加者同士が話す時間を、半ば選び取れるように半ば強制的に設けた。例えばアーティストの村上慧氏がゲストの第４回。座って聞いていればよい前半があり、後半はどうぞどうぞと焚き火に誘導される。参加者は帰りますとも言いづらい空気をおそらく感じつつ、村上氏に近付いたり、話よりマシュマロを焼くことに熱中したり、距離を保ちつつ耳を傾けたり、それぞれの振る舞いを選び取っていたように思える。

「○○を捉えなおす」とか「一緒に考える」というフレーズを定型句のように繰り返してしまうのだけれど（そしてその努力を欠かしてはいけないと思っているのだけど）、そんなことを言ったって「生活」は続くし、逃れられない。「う～～～ん」と悩み続けてもいられない。だからこそ2時間くらいのすこしの間、「う～～～ん」と言い合う時間をつくっていきたいし、それを続けたいと思う。各回の告知の際に出した文章や、内容のレポートは文化創造館のウェブサイトに残っているので、詳しくはそれを読んでいただけたら幸いです。（文：石山律）

第4回「俺の家、路上なんだけど遊びに来なよ」焚き火を囲んで参加者とおしゃべり

第1回・第2回「ちがうまま集まり、つくること　映画『記憶との対話～マイノリマジョリテ・トラベル、10年目の検証～』の上映」
日時：2021年7月10日（土）　会場：にぎわい交流館AU　登壇：樅山智子（作曲家、マイノリマジョリテ・トラベル・クロニクル実行委員会代表）、ほんまなほ（フィロソファ、大阪大学教授、ガムラン奏者）、岩井成昭（美術家 ※第1回のみ）

第3回「“ホーム”を捉えなおす」
日時：2021年10月23日（土）　会場：秋田市文化創造館 2階スタジオB　登壇：坂下美渉（NPO法人あきた結いネット理事長）、西原珉（セラピスト、キュレーター、「トナリ」代表）

第4回「俺の家、路上なんだけど遊びに来なよ」
日時：2021年11月28日（日）　会場：秋田市文化創造館 屋外エリア　登壇：村上慧（アーティスト）

第5回「自分のためにつくること」
日時：2022年1月16日（日）　会場：秋田市文化創造館 1階コミュニティスペース
登壇：はらだ有彩（テキストレーター）、野中モモ（ライター、翻訳家）

第6回『カルチャカイvol.12「かたる」×未来の生活を考えるスクール 振り返り＆公開企画会議』
日時：2022年2月6日（日）　会場：秋田市文化創造館 1階コミュニティスペース

各回のレポートはこちら

カルチャカイ「モヤモヤをかたる場」

カルチャカイは様々なアイデアを語る／遊ぶプログラム。思いついたアイデアをどうしたらいいかわからない方、漠然とした悩みをなんとなく抱えている方、何かしたいがその何かがわからない方が集った全12回。

カルチャカイ〈かたる〉は、日常の中で生まれた「やってみたいこと」「モヤモヤと考えていること」を言葉にして、誰かと語り合ってみるコミュニケーションプログラムです。決められたトークテーマもありません。その日の参加者によって、内容が変わります。

とある会でのこと。この日の参加者は、7人。世代が異なる参加者が手元にお菓子と飲み物を置きながらテーブルを囲みます。簡単な自己紹介をした後、ファシリテーターの「話したいことがある方いますか？」の声かけに参加者の一人がそっと手をあげ、この日の〈かたる〉時間が始まりました。そこで出たのは「自分の実家が空き家になってしまう、どうにか活用方法を見出したい」というモヤモヤ。すると、「空き家を活用したプロジェクトを知っている」「実はうちも同じ状況で…」「地域で何かを始めようとすると他人の目が気になってしまう…」など互いの言葉に触発されながら、話が広がっていきました。もちろん、じっと聞き考える人もいます。終わった後も、もっと詳しく聞きたい！話したい！と、あちこちで立ち話が始まりました。

自分の内側にあるものを「言葉」にして伝えてみる。ただそれだけのとても単純なことですが、思いがけず、共感し合える人と出会えたり、新しい視点に気づけたりするのが、不思議でおもしろいところです。

次年度も少しかたちを変えて〈かたる〉場が開かれます。もしも、自分の内側にあるものを誰かに話してみたいと思ったら、参加してみてください。無茶だろうと笑われてしまいそうな思いつきも、一人で抱えるしかないと思っていたモヤモヤも、言葉にして誰かに伝えてみたら、何かが動き出すかもしれません。（文：齊藤夏帆）

舞踏劇「イザベラバードの久保田紀行」を見て

文化創造館パートナー・土方巽記念秋田舞踏会が、イザベラ・バード（1831-1904年）の本『日本奥地紀行』をもとに、湯沢市院内から青森県境の矢立峠までの道中に見た農民の生活をモチーフに踊りました。

写真：菅野証

代表の米山伸子さん、演出のさとうみつこさんのインタビューはこちら

NPO法人土方巽記念秋田舞踏会「イザベラバードの久保田紀行」
日時：2021年12月4日（日）
会場：スタジオA1
演出：さとうみつこ　今野日香流
出演：さとうみつこ　松野輝大
秋田の身體メンバー・公募生
特別出演：小林嵯峨（第3幕）
主催：NPO法人土方巽記念秋田舞踏会

2021年12月、秋田市文化創造館スタジオA1にて、舞踏劇「イザベラバードの久保田紀行」が上演された。核となった「秋田の身體（しんたい）」は「NPO法人土方巽記念秋田舞踏会」のメンバーで構成されるグループである。舞踏会は秋田が生んだ「舞踏家・土方巽」を再評価するため秋田市民を中心に発足。公演や土方著「病める舞姫」の読み解きなどを重ねてきた。今回は明治期に秋田を旅した英国人紀行家イザベラ・バードが記した『日本奥地紀行』をベースに、バードと通訳の伊藤鶴吉が見た秋田の風景を舞踏劇として描いた。

特筆すべきは出演者たちの身体＝身體である。彼らが舞台に立つというリアリティはゲストの舞踏家・小林嵯峨に引けを取らないほどであった。地道に続けてきた「病める舞姫」の読み解きや舞踏研究の賜物だろう。演出を務めた舞踏会のさとうみつこは出演者の内面を重要視したという。例えば、野良着から素の自分になる「脱ぐ」という行為において、その本質とは何かを互いにディスカッションすることで、動きではなく内面を共有した。

今作では“バードの旅”という文脈を借りたが、次のステップは現代の秋田に焦点を当てて、さらにその本質に迫っていくことではないだろうか。今作を通じて私は秋田を生きる/生きていた人々の片鱗を垣間見ることができた。それは実にたくましく、悲しくて、滑稽で、美しかった。今作は“土方の初期作品、原初的な舞踏に類似していた”という声も上がったそうだ。それは大袈裟に言うと、土方が築いた舞踏を継承しつつ、全く新しい舞踏を生み出すチャンスがあるということである。彼らをそして秋田を眼差し続けていきたい。（文：島崇）

みあげてごらんそこにいるよ ＋ 冬に土と植物に出会う

3年目となる「こどもアートLab」は、秋田公立美術大学が主催する小学生・中学生を対象としたアートスクール。当館では美術家の藤浩志さんによる「みあげてごらんそこにいるよ」と、同じく美術家の村山修二郎さんによる「冬に土と植物に出会う」が開催されました。

2日かけて行われた藤Labリーダーによるプロジェクトは「素材に向き合う」レクチャーからスタート。美大生とも意見を交わしながら好きな素材で試行錯誤し制作にのめり込んでいく子どもたち。「無印良品」の紙袋や洗濯洗剤「アタック」の空き箱、七夕の飾りを模したオブジェ、太陽と雨と雲のコラボ、赤いリボンのタコ、折り紙100枚をつなげて折った鶴、松ぼっくりと小さな虫。藤Labリーダーも流木を使った新作を発表。手元にあった作品は、スタジオA1の高い天井からぶら下がると違ったものに見えてくるなど、広々としたスタジオA1で「空間のマネジメント」を体感しました。展覧会後は、小学生も、中学生も、美大生も、当館スタッフも助け鬼やフルーツバスケットで大はしゃぎ。壁に映る影まで綺麗でした。村山Labリーダーのもとでは、外に出て探索するように雪を掘り土と植物に出会う体験をしつつ、屋外広場をめいっぱい使って雪あそび。その後キッチンでウコン（ターメリック）染めにチャレンジ。染まった布は一本の紐に結ばれて様々な絞り模様の黄色い布地が冬空にたなびきました。最後には村山リーダーから春を待つ子どもたちへ自家栽培の藍の種をプレゼント！春に向けて、子どもたちの活動は続きます。

写真：坂口聖英

みあげてごらんそこにいるよ
日時：2021年12月11日（土）-12日（日）
会場：スタジオA1
主催：秋田公立美術大学

写真：岡本真実

冬に土と植物に出会う
日時：2022年1月15日（土）
会場：屋外広場＋1階コミュニティスペース
主催：秋田公立美術大学

あこがれの冬毛

デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）と当館は、2021年9月、デザイン、及び文化芸術等の新しい価値の創造に関わる分野の相互交流と協力強化を目的とし、協定を締結しました。KIITOとマヌルネコに会える神戸どうぶつ王国は、ポートアイランド線で一本のようですよ。

全国でも寒波や積雪で厳しい日が続いたこの冬。春を待つ間、心の支えとなっていたのは、動物の冬毛観察でありました。始業前の雪かき中に、文化創造館の敷地内を散歩で通る秋田犬のアキちゃん。秋田犬の中では珍しい長毛種で、この季節はふわふわの冬毛をまとって雪の中を嬉しそうに歩いていきます。冬を待ち遠しく思っていたのが伝わってくる表情です。年末には、神戸どうぶつ王国でマヌルネコを見ました。分厚い体毛が、積雪や凍結した地面から身を守っています。冬毛をまといずっしりしたボディで、寒くっても冷たくっても活発に動き回ります。

冬を愛する生き物だけがまとうことを許されたあこがれの冬毛。人間（私）は羨望の眼差しを向けるばかりです。（文・写真：藤本悠里子）

アキちゃん

マヌルネコ

KIITOのウェブサイトはこちら

センシューテラス 西根佳奈子さん（スパイラル・エー）

これまで何度、コーヒーやお菓子やパンを売ってもらったでしょうか。笑顔で、いつも出迎え、少し話をして、ほっとさせてくれる人。

ここにくる前は、老人ホームや介護施設、障害児施設の給食を作っていました。小さい頃から料理が好きでした。一人っ子で、ずっとお母さんと一緒で、ついて回って真似して、母の趣味が私の趣味みたいな感じです。三食しっかりご飯を手作りする人で、一人で暮らしてみてそんなことって難しいと分かりました。

子どもにとっては、おやつも、一日の摂取カロリー、栄養バランス的に重要で、どうしても既製品のおやつだと脂質や油分が多く、カルシウムやタンパク質をおやつで補おうとすると、手作りのおやつは栄養価も考えやすい。初めて一人で大量に作ってみんなに食べてもらったときに、「おいしかったよ！」「また作ってほしい！」とか、やっぱり子どもって素直な意見を言ってくれるから、嬉しくて。ご飯は今までもちろんいっぱい作ってきたけど、ご飯とおやつって、子どものテンションの上がり方が違う。ご飯はあまり食べないのにおやつだと食べるねって。食の好みも違う、幼稚園から高校三年生までいる施設だったので、何を食べさせるのか考えるのが楽しくて。秋にスイートポテトを作ったんです。子どもたちが学校のファームで掘ってきたおイモを、どろどろの状態で、「これでなんか作ってほしい！」って持ってきて、じゃあスイートポテト作ってみようかって。「俺が掘ってきたイモで作ったおやつなんだぜ！」って自慢するのもかわいかったし、これが食育なのかもと思いました。そこからお菓子を作るのを仕事にしてみたい、もっと専門的な知識を学べないだろうかと調べて、すぐお菓子に触れられるのはカフェかケーキ屋さんかなと思いスパイラル・エーに入社し、センシューテラスで働くようになりました。

ドーナツが今、プレーン1種類。ドーナツの生地にかぼちゃやおイモ、ホウレンソウ、キャロットを練り込むとか、見た目も華やかになるドーナツを作ってみたいなって。お客さま全員に寄り添うのは難しいけども、今、何を迷ってメニューを見てるんだろうなとか、自分だったらこういう説明があると買いやすいかなというのを意識的に考え、居心地のいいお店、また来たいって思っていただけるようなお店になればと思います。常にお店にいるので。よろしくお願いします。

写真：高橋希　聞き手：熊谷新子

●センシュードーナツ
文化創造館の屋根の丸窓を象った定番おからドーナツ。スパイラル・エー代表の東海林諭宣さん考案。ほとんどがおから、小麦粉少し、卵と砂糖ちょっと、バターのかわりにオリーブオイルを使用した、ノンフライの焼きおからドーナツ。老若男女に愛される優しい味。¥178（tax in）

●マカロン
亀の町ベーカリーで21年2月に始まったお菓子ブランドet tortue（エト・トルチュ「亀と」という意）のマカロンも入荷。苺、ショコラ、抹茶味の3種。ずっしり、ぎっしり、ぺろり。生チョコに近い食感のガナッシュチョコをサンドしたショコラが一番人気。¥270（tax in）

●エクレア
2022年2月にリニューアルしたエクレアはふわふわではなくザクザクのクッキーシューに、トロトロのカスタードクリームがたまらない。試作を繰り返した絶妙な甘さのカスタードクリームをその場でたっぷり絞り、粉砂糖をふりかけます。おもたせにも。¥270（tax in）

●ドラフトティー
千秋公園にあった茶室をイメージ。
鎌倉のCHABAKKA TEA PARKSのドラフトティーは、アイス緑茶なのに泡があり、茶葉の甘さ引きたち、喉ごしがくせになる。炭素注入を窒素にした特製ビールサーバーでいれた、煎茶の「あさつゆ」と紅ほうじ茶の「ごこう」も御賞味あれ。Regular ¥660 Half ¥440（tax in）

●焼きいもパフェ
オジモイモ屋と西根さんの会話から生まれた限定メニュー。県産の紅はるかや安納芋の焼きいもを、ペースト、サイコロ、チップス状にし、雄和の農場の牛乳を使ったソフトクリームにゴマのキャラメリゼ、底にはセンシュードーナツが隠れています。¥500（tax in）

館内ガイド＆利用方法

秋田市文化創造館の各施設は、1時間単位での専有利用が可能です（有料）。使い方のご相談にものります。ご利用に関する詳細については総合受付で配布しております「ご利用ガイド」をご覧ください。
お問合せ：018-893-5656

ウェブサイトでもご覧いただけます。

かえるくんの散歩

かえるくんは冬の散歩が苦手。寒いところの仲間たちは冬眠しているらしいが、南のかえるは冬眠しない。でも寒いのはとても苦しい。だから春がとても楽しみ。ぴょんぴょんと出かけ新しい発見に出会う。ある日、かなりの厚着で出かけてみた。ぴょんぴょんの元気がなくて、じわじわゆっくり歩いてみた。すると見える世界が変わった。いつも飛び越えて出会えなかった生き物たちとじっと見つめあった。そして一緒に散歩した。今まで気づかなかったことが溢れ出た。一人での散歩も楽しいけど、だれかと散歩するのは格別に素晴らしい。いつもの景色が違って見える。「だれと」が変わると世界が変わる。

文＝かえるくん（館長代理）　絵＝藤浩志

発行：2022年3月21日　発行元：秋田市文化創造館（指定管理者：NPO法人アーツセンターあきた）
デザイン：服部一成　編集担当：熊谷新子